

「渥美奨学生の集い」講演録

# 鹿島守之助とパン・アジア主義



## ■ S G R Aとは

<http://www.aisf.or.jp/sgra/>

S G R Aは、世界各国から渡日し長い留學生活を経て日本の大学院から博士号を取得した研究者が中心となって、個人や組織がグローバル化に立ちむかうための方針や戦略をたてる時に役立つような研究、問題解決の提言を行い、その成果をフォーラム、レポート、ホームページ等の方法で、広く社会に発信しています。研究テーマごとに、多分野多国籍の研究者が研究チームを編成し、広汎な知恵とネットワークを結集して、多面的なデータから分析・考察して研究を行います。S G R Aは、ある一定の専門家ではなく、広く社会全般を対象に、幅広い研究領域を包括した国際的かつ学際的な活動を狙いとしています。良き地球市民の実現に貢献することがS G R Aの基本的な目標です。

## ■ S G R Aかわらばん

[sgra.office@aisf.or.jp](mailto:sgra.office@aisf.or.jp)

S G R Aフォーラム等のお知らせと、世界各地からのS G R A会員のエッセイを、毎週2回（火・金）、電子メールで発信するメールマガジンで、どなたにでも無料でご購読いただけます。登録手続きは、S G R A事務局にご連絡ください。

# 鹿島守之助とパン・アジア主義

平川 均

名古屋大学経済学研究科教授、SGRA顧問

2007年11月2日 午後6時～7時30分

於：鹿島新館ホール

このレポートは、名古屋大学の『経済科学』第55巻4号（2008年3月）に掲載予定の同タイトルの論文の内容について、2007年11月2日に行われた渥美国際交流奨学財団の集いで発表していただいたものを、平川教授のご許可を得て編纂しました。

## 開会挨拶

渥美国際交流奨学財団

理事長 渥美伊都子

常務理事 今西 淳子

(今西) 本日は、わざわざ関口までいらしていただき、ありがとうございます。「渥美財団の集い」は、毎年10月か11月の渥美財団の月例会のときに、割とこぢんまりとしたサロンのような雰囲気で開催しています。

去年は寺島実郎さんに来ていただきましたが、そのときもエピソードがありました。寺島さんが高校生のときに、クーデンホーフ・カレルギーのパン・ヨーロッパの思想に出会い、鹿島守之助という人がクーデンホーフの本を出していることを知りました。しかし、「お金がないから、古本でいいから、その本を送っていただけませんか」と、鹿島守之助さんに手紙を書いたのだそうです。すると「どの本が欲しいですか」という返事がすぐに来て、その後、段ボールいっぱいの本が送られてきたというお話だったのです。いろいろなところで、鹿島守之助とパン・ヨーロッパ、パン・アジアというものがつながってくることになるものだと思います。今日は、名古屋大学の平川先生が鹿島守之助のことについて研究してくださったので発表していただきますが、その経過も後ほど説明したいと思います。

まず初めに、理事長からごあいさつと、鹿島守之助の紹介をいたします。

(渥美) 今日皆様お集まりくださりまして、ありがとうございました。今日は鹿島守之助のお話を平川先生がしてくださるということですが、私の父であるこの人のことを、奨学生の方たちはご存じないと思います。鹿島建設の社長と会長を長年やった建設業の大ボスであったこと、それから最後の方に参議院議員になって大臣までしたということは大体ご存じかもしれません。父は東大を出てから、外務省に入って外交官になりました。最初に赴任したのがドイツのベルリンで、そこですごく感激的なお話があります。パン・ヨーロッパを提唱しているクーデンホーフ・カレルギー伯爵という思想家に会ったのです。アメリカ合衆国に対してヨーロッパを統一しようという考えが、パン・ヨーロッパでした。年はちょっとクーデンホーフ伯の方が上ですが、大体同じような感じで、若き青年のときに、「自分はパン・ヨーロッパを理想として活動するから、君はパン・アジアをこれからしていきなさい、アジアをまとめていきなさい」と言われたのです。父は夢いっぱい帰国し、外務省をその後辞めまして、第一次世界大戦の原因の研究をして、博士を取りました。それから建設業の方に入ったのです。戦争とか戦後のいろいろな場面があって、大東亜共栄圏とか、思想的に非常に難しいこと



もたくさんありました。私たち家族は、建設業だけをやっているのだらうと思っていましたら、平川先生がご研究になっていらっしゃるように、いろいろなことが発表されてきております。

父は、パン・アジアをいつか実現しようという夢をずっと持ち続けていました。ここに書いてあります書は、自分の遺書にしたいと言って書いたのだそうです。クーデンホーフを見出したエリオという人の言葉を自分なりに作ったものだそうです。これが最後の言葉ということで、残してあったものを、今、たつの市の実家の碑に書かれています。いつか実現しようと思って、夢を見て終わってしまったわけです。その夢は残されたのですが、今になって、大分アジアがそのような雰囲気になってまいりましたので、いろいろな方がアジア統合や共同体の研究を始めていらっしゃるようです。

今日は平川先生に鹿島守之助とパン・アジアのお話を伺いたいと思って楽しみにしております。先生も名古屋大学で経済学を教えていらしてお忙しいのですが、いろいろな資料をお読みになってまとめられたものですから、ぜひ皆様、留学生の方たちもよく知っていただきたいと思います。私の父ですし、ここにおります孫たちでさえも、余り知らない話なものですから、ぜひ伺いたいと思っております。

(今西) 鹿島守之助というのは、理事長のお父さんということがお分かりになったと思います。つまり、私のおじいさんです。

最初は外交官でした。学者ではないのですが、本がすごく好きな人で、博士論文を第一次世界大戦の原因の研究ということで出しました。外交官としてドイツとイタリアに赴任し、日本に帰ってきてから、政治家にもなりました。多分、世の中を変えたいという気持ちがすごくあった人だと、私は思います。学者的な要素もすごく強く、皆さんが書いているように博士論文を書きました。皆さんが考えているように出版をしたいと思ったのですが、出版社がなかなか見つかりませんでした。その後、結婚してしばらくたってから鹿島建設に入って、鹿島建設が戦後大きくなったものですから、いろいろな活動ができるようになりました。それで出版社を作りました。それが鹿島出版会です。SD（スペース・デザイン）とか、建築系の本が多いのですが、鹿島守之助のライフワークであった外交関係の書物もたくさん出ています。しかしながら、本を活字にしても売ってくれるところがないという現実におつかりました。それで最後に本屋を作りました。それが今、東京駅のそばにある八重洲ブックセンターです。すごくいいでしょう、そういう話は。多分、学者さんであれば、もうみんな夢のような話だと思えます。そのように、たくさんの夢が実現できた人だと思えます。

でも家族としては、もちろん鹿島建設の社長としての祖父の方が強かったですから、どちらかというこ



これらの本は趣味で発行していて、場所ばかりとって困ったもんだと話していたものです。家族としては、少なくとも私としては、この本をどのように評価していいのかわかりませんでした。ところが、渥美財団を始めてからアジアの方と話すようになって、「この外交論選集で、私は勉強しました」という人に何人も会うようになりました。つまり、このような本を出版して、アジア各国の大学の図書館に送ることが祖父のプロジェクトの

一つだったわけです。今から 40 年前ですと、アジアの国々の大学図書館には資料が少なかったですから、図書館に寄贈されていたこの外交論選集で外交を勉強した人がいて、その人が日本との接点がありますから、私と出会うことがあったという、そのような循環となったわけで、鹿島守之助の広さ、大きさまたいなものを、財団ができてから知り始めました。

そして 1997 年のアジア通貨危機以後、アジアがすごく変わってきたところへ、この「パン・アジアの実現を見ることである」という遺書に出会いまして、これをどのように評価しているのかというのが、私の課題の 1 つでもあったのです。今でこそ、「アジア共同体」という言葉を皆が言えますが、渥美財団を作った 1995 年でさえ、この言葉はすぐには言えない雰囲気だったと思います。祖父の業績を出せるのか出せないのかというのも、私の 1 つの問題でした。最初に理事長の言葉として年報に出したのが、1999 年度の年報ですから 2000 年 6 月です。そのときは、奨学生の皆さんと話をしていた「これ、出せるんじゃないかな」と思って出しました。それぐらい日本人にとって、パン・アジア、アジア共同体ということ、アジアの皆さんを対象にして出すというのは大変なことだったと思います。それが今、そうでなくなったということは、ものすごい変化だと私は思っています。

そして、アジアの協力関係を研究し、アジアの研究者たちと共同作業をしている方に初めて出会ったのが、平川先生でした。2000 年に関口グローバル研究会という、元奨学生のネットワークを生かして知日派外国人研究者の声を発信していく S G R A の活動を始めたときに、今日も参加してくださっているマキトさんと、現在、北陸大学で教授をされている李鋼哲さんの紹介で、「すごくいい先生がおられるから、先生にぜひ話をさせていただきたい」と言って紹介していただきました。2001 年 2 月の第 2 回 S G R A フォーラムでお話をいただいたときに、平川先生に初めてお会いしました。そのときはまだアジア共同体という言葉は使われませんでした。使えないぐらいの雰囲気でした。でも、先生は、1997 年のアジア通貨危機から状況がすごく変わってきているというお話をしてくださいました。「新宮沢構想」の話があって、宮沢元首相の提案によって、通貨危機の時に、アジアに対して日本が大きな援助をしたことによって、アジアの中で助け合うという気持ちが生まれたのではないかというお話でした。宮沢喜一先生は父が非常にお世話になったというか、父の方からすごく親しく私淑させていただいていた方です。そこで、次の年に軽井沢でフォーラムを開催して、宮沢先生に来ていただいてお話を聞いたりもしました。そのときも平川先生には、アジアの経済協力が進んでいるかというお話をさせていただいています。全部、レポートになっておりますので関心のある方は是非お読みください。

もう 1 つ、私が気になっていたのは、花岡事件というのがありまして、それが一体何なのか、私の方からは見えませんから、今、桜美林で准教授をされている李恩民さんが中心になって研究をしていただき、「戦後和解プロセスの研究」という S G R A フォーラムを開催しました。それは、パン・アジアとは直接は関係ないのですが、そのようなこともできるようになってきたというのが 1997 年からここ 10 年の本当に大きなアジアの変化だと私は思っています。

平川先生が鹿島守之助について研究してくださったのは、多分、アジア共同体ということが前面に出てきたときに、日本人で戦前からアジア共同体を研究している人がいて、それがたまたま鹿島守之助であったということなのだと思います。「研究してみたいけれどもどうでしょうか」というお話を伺ったとき、「鹿島守

之助は資料がたくさんあります。出版するのが趣味の人でしたから、残っていますし、まとまっていますから、ぜひお願いします」とお答えしました。そして、今年の初めに、4日間だったか、鹿島守之助の記念室に来ていただき、ずっと研究して纏めてくださった成果を今日発表していただきます。学術的にはこのご研究内容は28ページの論文になっており、名古屋大学の『経済科学』に掲載されることになっているそうです。私としては、膨大な祖父の著書を28ページに纏めてくださったのだからとてもありがたいと思っております。それでは、平川先生、どうぞよろしく願いいたします。



講演

# 鹿島守之助とパン・アジア主義

平川 均

名古屋大学経済学研究科教授、SGRA顧問

## 【報告の構成】

### ■ はじめに

- [1] パン・ヨーロッパ運動との出会いとパン・アジア主義
  - (1) クーデンホーフ・カレルギーとの出会い
  - (2) パン・アジアの提唱
  - (3) 鹿島守之助の実践哲学
- [2] パン・アジア主義と大東亜共栄圏論
  - (1) 日本外交と対中国政策
  - (2) 大東亜共栄圏の幻想からの離脱
- [3] アジア・太平洋共同体論とパン・アジア主義
  - (1) アジア・太平洋共同体論の提唱
  - (2) 国際政治の勢力均衡論
  - (3) アジア・太平洋からパン・アジアへ
- [4] 鹿島守之助のパン・アジア主義：小活と幾つかの論点

## ■はじめに

名古屋大学の平川です。S G R Aの会員でもあります。私が、このテーマを研究しなくては行けないと思い始めたのは、渥美財団およびS G R Aの活動にかかわらせていただくようになってからです。渥美財団はどうしてこのような活動をされているのか、それには恐らく何か哲学があるのではないかと思ったからです。それが鹿島守之助という、今西さんから言えばおじいさまに当たられるわけですが、その方に行き当たりました。私自身、『対外経済協力体系』などを大学院の学生のときに読ませていただいています。鹿島平和研究所のアジアにかかわるいろいろな成果は、私が研究者として育ってくる過程で重要な資料また研究書でしたので、勉強させていただいたものでした。だから、この研究はしなければいけない、してみたいと思ったのです。

今日の報告は、今はまだ試論ですが、あくまでもアカデミックな形で考えてみたいと思っています。結論は、今、渥美理事長が実践されている、この活動と非常に深い関係があって、しかもある意味では、遺志を継がれながら、同時にその遺志を超えて、今の活動があるのではないかと考えております。結



論はたまたまそうなってしまったということなのですが、今の時代にもし鹿島守之助氏が生きておられれば、恐らくこの財団がしておられるようなこともされたいと思います。

ではその話をさせていただきますが、タイトルは「鹿島守之助のパン・アジア論への一試論」です。まだ発表はしておりません。今日、お聞きになった方々で、事実関係が誤っているとか、もう少しここは直した方がいいということに気づかれたときには忌憚なく教えていただきたいと思います。1時間で終わらせるために、枝葉はすべて取って、ただロジックだけを追っていくレジュメにしてあります。鹿島守之助という人は、このようなことをしたという全体像を知って、なぜそのように生きられたのか、活動されたのかということを理解していただきたいと思います。

まず、3つの時期に分けて、鹿島守之助氏がどのような思想的変遷、あるいは発展をしたのかということを見ていきます。まず初めに戦前です。それから戦中、そして戦後と、3つの時期に分けて、しかしそれらがすべてつながっているということをお話ししたいと思います。今からは敬称は略します。

先ほど理事長と今西さんがお話しになりましたが、鹿島守之助が人名事典等でどのように説明されているだろうかと、私自身も調べてみました。そうすると、鹿島建設の元社長で傑出した経営者である、そして政治家でもあった、学者でもあったという形で書かれているのですが、パン・アジアを唱えた人であるということをはっきり指摘したものはありませんでした。しかし、彼は大変な量の研究書を出していて、日本外交史研究の領域、そして日本の外交に対して非常に大きな影響を与えています。しかも、亡くなる2年前に、「わが最大の希願はいつの日にかパン・アジアの実現を見ることである」という言葉を残したわけです。これは鹿島の関係者以外はほとんど忘れ、今では知られていない事実だと言っていると思います。この言葉が戦前から生涯

を通じてどのようにつながっているのかということを考えてみなければならないのではないかと思うのです。研究をしてみても、私は、パン・アジアを唱えた鹿島守之助の思想や行動を今の時代にもっと正當に評価すべきであると思っています。

## [1] パン・ヨーロッパ運動との出会いと パン・アジア主義

### (1) クーデンホーフ・カレルギーとの出会い

まず、「パン・ヨーロッパ運動との出会いとパン・アジア主義」ということでお話をします。1920年に東京大学を卒業して、すぐに外務省に入り、1922年にドイツの日本大使館へ一等書記官として勤めます。赴任してすぐ、ベルリンとウィーンで発行されていた2つの新聞に「パン・ヨーロッパ」というクーデンホーフ・カレルギーの論説が出て、これを読む。そして、当時の駐独日本大使の仲介により、ほどなく彼と会うことができた。こうして、彼はその考え方に完全に共鳴します。そしてカレルギーの書物の翻訳をする。ご本人もこの経緯について書いています。

では、クーデンホーフという人は何を主張したのでしょうか。彼は、3つの条件からヨーロッパは統合をすべきであると主張しています。科学技術が発達したことによって、ヨーロッパでは悲惨な戦争が起こっている。飛行機ができ、戦車ができ、そうしたものがものすごく悲惨な戦争を起こす。科学が発達することはいいことだけれども、負の側面がヨーロッパで極端な形で出ている。それからロシア・ソ連の脅威がある。1917年にロシア革命が起こりましたから、世界を動かしていく1つの思想として、共産主義・社会主義運動が出てきます。そのようなものに対する脅威がある。それから、アメリカがものすごく発展してくる。1918年、第一次世界大戦が終わった時に、オズワルト・シュペングレーが『西洋の没落』という本を出し、非常に大きな影響を与えたといわれますが、ヨーロッパに悲観主義がまん延していました。そのような中で、クーデンホー

フは、パン・ヨーロッパによってヨーロッパは再起しなければいけないという思想を訴えたわけです。鹿島はアジアを意識しつつ、その主張を基本的に受入れるわけです。

鹿島は、クーデンホーフに会うことによって、彼自身の人生の哲学を獲得する契機を得ました。まず、彼は、1927年に『汎ヨーロッパ』というクーデンホーフの著書を翻訳します。1929年には、第10回国際連盟総会に参加して、フランス首相のブリアンとドイツ首相のストレーゼマンが、パン・ヨーロッパ運動を支持する現場に立ち会うわけです。そしてそこから、自分も外交官を辞めて、パン・アジアの運動をする意志を固めます。先ほど渥美理事長が言われましたが、クーデンホーフから鹿島へ「アジアの統合の運動をしなさい」という勧めがあったということです。翻訳書が出て2年後の1929年11月末だったと思いますが、外務省を退官して、1930年2月の衆議院議員の総選挙に立候補し、見事に落選しました。

### (2) パン・アジアの提唱

パン・アジアの提唱ということについては、1926年に『汎亜細亜運動と汎欧羅巴運動』という単著を出しています。その中で主張していることは、クーデンホーフの基本的な考えに沿っています。国際連盟と国家の間に幾つかの連合が生まれるという歴史の必然の流れがあって、それは5つの連合になる。国際連盟が1920年にできますが、その国際連盟の下で、アジアを含む5つの地域に分かれて統合されていくという動きがあるのだということです。そのうちの1つがパン・アジアで、そのパン・アジアについては、自分で運動体を創っていくのだという使命感を持つわけです。当時、パン・アメリカがあった。それからイギリス連邦がある。ロシアではソビエト連邦がある。ないのは、パン・ヨーロッパであって、これはクーデンホーフがする。パン・アジアは鹿島自身が担うという考えです。

では、パン・アジアの形成は可能なのか。当時のアジアでは英米の帝国主義列強による支配、搾取・

侵略の政策が行われている。それから、ロシアの軍事的脅威がある。そのようなことから考えれば、アジアが共通の1つの意識を持つことはできる。それをパン・アジアに結び付けていくという考え方を取ったのです。

その次が非常に重要なところなのですが、ではパン・アジアの形成の道はどのようなものなのか、どのような道を通っていくのかということです。彼は次のような考え方をします。アジアには、2つの「覚醒運動」が起こっている。1つは何かというと、日本と中国です。この両国は曲がりなりにとも国家を形成している。自立した近代的な意味の国家が中国にあったかどうかという問題はありますが、独立自由を得た諸民族がいて、それが運動をしている。それを鹿島は「総合運動」と表現しています。もう1つは、植民地です。インド等の植民地があって、解放を得ようとする諸民族の「独立運動」があります。この2つの運動がアジアにあると理解したわけです。

その2つの運動について、当時の日本には民族独立運動に合流して、帝国主義列強の支配を打ち砕こうという傾向があったわけですが、彼の考え方は違っていました。植民地の独立を支持すると、帝国主義国家から抑圧された民族が独立するということから、国際連盟という当時の世界平和の主要な秩序を否定することになる。しかも、もし、日本がそのようなことを本気で追求していくならば、英・仏・オランダとの戦争が不可避になる。果たして日本はそのようなことを担うだけの実力があるのかということが問題になる。結局、とてもそのような実力はないのだから、日本が取るべき方法は、理想主義を断念し、まずは曲がりなりにでも独立している2つの中心的な国が国家連合を組むことによって、アジアを復興させるのだと考えます。

それについては、「不履行の完全を望むよりは不完全なる履行に満足するを以って、可とする」という言い方をしています。つまり、植民地の独立運動は、取りあえず断念するという考え方なのです。そして「印度の独立を援助する意味の汎亜細亜運動は、餘に精神的にして餘に非政治的」と唱え

ます。これは大川周明の当時の思想を意識しているのではないかと思います。この頃、大川周名というアジア主義者が、中村屋にカレーライスを紹介したチャンドラ・ボースですが、彼の日本での亡命を助けたり、イギリスに対するインドの独立運動を支援しているわけです。日本の多くの人たちがそれを心情的に支持していたのではないかと思います。それに対して、鹿島は、独立は断念して、不完全だけれども取りあえず日中の国家連合という形でアジアの復興を考えようと主張したのです。日中は連合していくことが非常に重要だと述べています。しかし現実には、日本は1910年に朝鮮を併合し、アジアに侵略していくという行動にでています。日本のこうした動きに対して鹿島は、これをはっきりと「侵略」という言葉を使っています。日本は中国に対して絶対に侵略をしてはいけない、これはやめるべきである、中国に対しては大々的の和親政策でなければならないという考えです。彼はパン・ヨーロッパに対するパン・アジア運動を担おうとしていたのです。

### (3) 鹿島守之助の実践哲学

なぜ彼はそのように考えたのでしょうか。私たちはなかなか当時を伺い知ることはできませんが、私が大学そして大学院と教わった恩師は、当然、戦前の教育を受けた方々で、今の若い人たちも悩みは多いと思うのですが、当時の方々は、特に知識人はものすごく悩みが多かったのです。鹿島守之助、当時は、永富守之助ですが、彼は京都の第三高等学校の校友会誌に論文を書いています。日本を憂えています。それはどういうことかということ、日本は西洋の文明を取り入れた、唯物主義と民主主義だ、デモクラシーとソーシャリズム・コミニズムだ。それは「開化せる俗物である」という言い方をしているのです。「自由を装う乱雑」、これは民主主義です。「平等に名をかりた平凡」、これは唯物主義だと思います。こういうもので社会を発展させていくことはできないというのが、彼の考えです。彼が高等学校時代に到達した考えは、「自我批判の生活」という

ことですが、常に自分の生き方を批判的に見る中から、自分というものを考えていくしかない。これは、ある意味で、堂々巡りの非常に暗い生き方です。ところが、クーデンホーフに会うことによって、彼は目覚めることとなります。

鹿島が一番影響を受けたクーデンホーフの著書は、『実践的理想主義』として後に訳される本ですが、それは3つの章からなっています。それぞれ1920年、1922年、1924年に発表されたものを集めたものです。第一章は「貴族」です。括弧付きにしてありますが「貴族」とは何かというと、いわゆる歴史的な意味での貴族ではなくて、人類発展の指導者を「貴族」と言っています。時代を、歴史を動かしていく、つまり、社会を発展させていく優れた能力を持った人、開明の思想を持つ人たちが歴史を創っていくのだとしています。それが「貴族」なのだ。第二章は「技術」。これは人類を豊かにするけれども、同時に悲惨な戦争を生むものである。そして、第三章では、悲惨な戦争があるからこそ「平和主義」的に、平和を求めていかなければいけないと主張しています。しかしながら、伝統的な宗教家や空想的平和主義者は、平和を言うけれども実際には動かない。動かなければ平和は作れない。ですから、実践的平和主義者でなければならず、それを行うのはどのような人かということ、歴史を創っていくという使命を担う人、「貴族」であり、そういう人たちによって初めて社会は進歩していくのだという。このような考え方をクーデンホーフに会って、彼の本を読み、翻訳することによって、鹿島は獲得していくわけです。明らかに、クーデンホーフに会って、鹿島の歴史観、あるいは生き方が変わるわけです。彼は生きる意味を獲得したのです。この思想が一生続くこととなります。

彼は1925年に東京日々新聞に「新貴族論」という文章を発表しています。その中で、「最善の政治は最善のデモクラシーとアリストクラシーの結合である」「時代は(新)貴族を必要とする」と書いています。当時の時代の中で、歴史を動かしていく

には使命感を持ってやっていかなければ駄目だと提唱しています。単なるデモクラシーでは「自由を装う乱雑」にしかならないということです。

## 【2】パン・アジア主義と大東亜共栄圏論

### (1) 日本外交と対中国政策

今までお話ししたのは、1926年のパン・アジア論における鹿島の到達点です。すなわち20年代に到達した彼のパン・アジア論です。1930年代になると、日本は大きく、まさに侵略の方向に動いていきます。1931年に満州事変が起こり、日本は1933年に国際連盟を脱退します。行き着いた先は大東亜戦争ですが、この時代に彼がどのように対応したかを考えてみましょう。これは非常に判断が難しいし、ご親族の方々にすると聞きたくない話かもしれません。しかし、彼を復権させるためには、ここをくぐり抜けなければ絶対に評価してもらえない部分です。

鹿島守之助は、1935年に「新平和主義」を発表しています。そこに「積極的平和主義は今日東亜に於ける唯一の現実的政策である」と書いています。自分の命をなげうって、世の中のため、国家のために生きるのだと考えるのは軍人だけのように見えるけれども、今は、平和主義を言うことこそが実は命にかかわるような勇気のいることなのだ、新平和主義を実践することは非常に大変なことなのだということが書かれています。

しかし、1938年に『防共協定とナチス・ファッショ革命』という、今から見るとすごいタイトルの本を発表します。そして、1943年には、『帝國の外交と大東亜共栄圏』という、もう1つの単著が発表されます。この中の基本的な考え方は、「日独伊三国は、『持たざる国』として現状を打破せんとする共通の立場にある」「満州国不承認戦線破壊の第一歩」であるということです。ヨーロッパの中で、ドイツとイタリアというのは後から起こってきた資本主義、あるいは帝国主義の国で「持たざる国」です。日本はアジアの中にありますが、帝国主義

の国として最後に出てきた国です。ですから、国家として承認された国の中では、以前から承認されていた国に対しては「持たざる国」になるわけです。そのような3国は、「現状を打破せんとする共通の立場にある」のだというわけです。彼は、ムッソリーニとヒトラーをこの本の中で評価しますが、この評価の仕方は、非常に悩んでいて、悩み抜いた中で書かれています。この本を読んでもタイトルとの落差が非常にあるように私には思われます。どういうことかということ、懐疑的分析が同時にありまして、ヒトラーが政権を執る方向に動いているときに、「政策の賢明ばかりに基づくものでなく、人民をして自己催眠にかからしむる心理作用をも利用している」と言っているのです。つまり、ヒトラーとムッソリーニがしていることは、理性的に判断すると非常に無理があるものなのです。評価しつつも、それははっきりとこの本の中で書いています。ですから、非常にバランス感覚の悪い本です。でも、それは彼が心の中で悩んでいるということだと、私は思います。

しかし、結局、1940年にヒトラーを礼賛します。最終的に挙げられる理由は、スタンリー・ハイという人物が、「ヒトラーはキリストに似ている」といったという言葉であげて、「ドイツ人の多くはヒトラーのキリストに似てゐることを発見したのである」と書いている部分だと思います。他人からの引用ですが、私には明らかに鹿島がそう納得しているからだと思います。これは非理性的な反応です。なぜ、彼がこのような言葉を引用したのかということ、クーデンホーフから学んだ「新貴族論」があるのです。実際、この文章が載せられた小冊子の節の頭は「今日世界に最も必要なのは指導者である」という文章から始まっています。選ばれたというか、ある使命感を持った人たちが歴史を創っていかなければ、歴史は進歩しないのだという考えです。ですから、ヒトラーやムッソリーニがなぜそこまで評価されるのかを考えたときに、彼らはその歴史を動かしていく人なのだから、それを何としても評価しなくてはならないということになるのだと思います。

理性的に考えるとできないわけですから、最終的には、他人の言葉を引用して、「キリストに似ている」とドイツ人が考えているのだという形で、それを認めることになってしまったと私は理解しています。いろいろなことを書いてありますが、私はこうした理解を通じて独裁者を受入れるという意味で、この言葉の引用はエッセンスだと思います。

そして同時に、大東亜共栄圏とパン・アジア主義を同一視していきます。これは私にはして欲しくなかったけれども、書かれているわけです。それはどのようになっているかということ、『帝國の外交と大東亜共栄圏』の序文の中にあります。「大東亜共栄圏の建設は私の20年来の持論であり又理想である」というわけです。先の1926年の『汎亜細亜運動と汎欧羅巴運動』という本の中では、絶対に侵略してはいけないと言っているわけです。では、それとの関係はどうなのかといいますと、「大東亜共栄圏においては今日日本の指導なくしては何事も考へられない」「日本の指導に立つ大東亜共栄圏か、將た没落か、二者何れかの一を選ばねばならぬ」という形で日本の指導を認めていくわけです。つまり、1920年代に、ソビエトができて、アメリカが強大な国になり、パン・ヨーロッパの運動がある、そのような中で、もしアジアがばらばらのままであったら、アジアは独立できない。ですから、アジアを1つにまとめるという使命感の中で、現状を是認していく形で大東亜共栄圏を支持していく。彼の立場からすると、このようにならざるを得なかったのです。そのように理解することができます。

## (2) 大東亜共栄圏の幻想からの離脱

鹿島自身は、大政翼賛会の調査局長をして、ちょうど1年少したった1943年に報告書を纏め、大東亜戦争1年目の戦果を強調しています。当時は、ドイツも日本も戦果が非常に華々しい時ですが、「持たざる枢軸国と持てる反枢軸国の地位は逆転」と書いているのです。ところが、この本も不思議です。最初はすごく元気です。しかしながら、鹿島守之助という人は、ものすごく理性的なのです。華々

しい戦果と同時に、アメリカの一大攻勢が起こってくるぞと、「敵米国の生産力には数量的にみれば驚くべきもの」があると書くのです。飛行機を年間2万何千機作れるとか、そのようなことが書いてあるわけです。ですから、これからは本格的に日本が反撃されるということを読んでいる、予想しています。

そして、これも不思議なのですが、当時既に、チャーチルとか、ルーズベルトが、大西洋憲章などで戦後どうするのかという話し合いをしています。それらの声明が、この本の中に付録として載っています。そして、その後、もし敗戦すれば「折角これまでの不合理な領土的分配を是正せんとし……占領地を掠奪者たる旧領有者に返還……」しなければならないが、それは「国際的一大不正、罪悪とも称すべき」である、だから戦争に勝利するために頑張らねばならないのだ、と書いているのです。これはしかし、日本が戦争に負けたら4島しか残りません、それを覚悟しているという話なのです。4島しか残らないということも、彼は分かっているのです。勇ましい彼の書物の中に、同時にこのようなことを書いているのです。

後に本人が書いていますが、1942年から1943年にかけて、鹿島組(当時)が海外にあっていろいろと活動をしてはいたけれども、「結局4島しか残らないのだから、帰れなくなると困るから早く帰ってこい」と電報を打ったのだそうです。占領地域にはいっぱい仕事があるわけで、占領地でいろいろな仕事をしてきた鹿島の社員に、この時期には帰そうとしていたのです。大政翼賛会の調査局長をされている間に、既にもうほとんど負けることを覚悟していたのだということです。でも、使命感だと思いますが、大政翼賛会にかかわりましたのでその仕事はするが、途中からは、やはりかわりたくないと思うようになっていったのではないかと思います。少なくとも1943年のある時期、本が発行されたその年の6月以前ですが、彼は日本が負けるということをはほとんど自明の事柄として受入れるようになっていたのです。

結局、日本は敗戦しますが、敗戦の翌日、8月

16日に、社長として戦後対策に関する訓示を鹿島全社に出しました。戦争が終わったから、さあどうしようではなくて、次の対策を考えて戦争が終わるのを待っていたわけです。そういう身の処し方をしたのです。しかし、大政翼賛会の調査局長をしたことなどから5年半ぐらい公職追放指定を受けます。

鹿島が大東亜共栄圏に期待したのは、1930年代の末から、多分5年ぐらいだと思います。これをどのように評価するかは、非常に難しい問題です。

彼は敗戦時に何を考えていたのかというと、敗戦そのものに対する恐怖ではありませんでした。日本の共産化への恐れでした。「前世界大戦において武力戦争のため崩壊した国は1つもなかった。ロシアはボルシェビキのために崩壊した」と書いています。考えなければいけないのは、敗戦ではなく、敗戦後の国のことであると認識しています。

1938年の社長に就任したときの訓示で、「我々が共産主義思想に弾圧を加えることは、国家に忠なる所以であると同時に、鹿島組の復興発展に欠くべからざる要素である」と言っています。これは、ある意味で資本家としての共産主義に対する、彼の1つの結論です。でも、それだけではないというのが、私の考えです。

外交研究の中から、鹿島守之助は、日本の理想とする時期は日露戦争から満州事変ぐらいまでだと考えていました。日本の安全保障上、この時期が最も良かったというのです。一番大事なのは、日英同盟があることによって、日本は発展の足がかりをつかんだことだと。日露戦争は、日英同盟があって初めてできた。日露戦争に勝って、日本は不平等条約をやっと取り除くことができた。日本は初めて一人前の国になれたわけです。そのよう時代を理想としています。

同時にイギリスの最大の輸出品はジェントルマンシップだと言っています。イギリスは契約を守る国であり、契約を守るということが外交上の紳士的な態度である。これと同じ国はアメリカなのだ後

に書いています。このような、アングロサクソンの人たちの文化に見られる、契約で社会を律するということを、すごく重視したわけです。そして、これは戦後の日米安保につながっていきます。

それに対して、ロシアという国は条約を結べない国だ、信用のならない国だと言うのです。自分がドイツに行っているときにもそのような話をいっぱい聞いたと書いてあるのですが、そうした見方には、同時に、外交研究の中でのロシア研究があり、さらに共産主義的なものがあると私は理解しています。

共産主義あるいは社会主義の思想は、鹿島の近代国家体系とは合わないのです。世界の平和秩序の基本は国です。今でもそうですが、近代国家というものを前提にして、そして国家間で同盟を結ぶなり条約を結んで、安定していく。その一番上に、国際連盟とか国際連合があるという考え方です。ヨーロッパでは1648年にウエストファリア条約の下での近代国家体系が生まれたわけですが、政治学者であり外交官でもあった鹿島は、世界の秩序というのは近代国家体系の下での秩序であり、そのような秩序があって平和が実現されると考えていました。これに対して共産主義思想では階級闘争を通じて国境を越えて革命が輸出されるわけです。だから、近代国家体系とは合わないわけです。共産主義は自分の認識体系に対する、非常に深刻な脅威の思想になります。このような理由から、彼はいわゆる共産化の危険を排除することが、日本が敗戦した後の課題として、最も重要な課題であると考えに至るのだというのが、私の理解です。

### [3] アジア・太平洋共同体論とパン・アジア主義

#### (1) アジア・太平洋共同体の提唱

1951年8月に公職追放が解けると、鹿島はもちろん、すぐに政治家になっていきます。そして、『外交評論』という月刊誌を1965年に創刊しますが、1966年1月号の中で、アジア・太平洋共同体を提

唱するのです。「パン・アジア」と言わずに、「アジア・太平洋の共同体」です。それは日本と東南アジア、オーストラリア、ニュージーランド、米国、カナダからなるという具合になっており、今日、小泉首相(当時)や外務省がいう拡大東アジア共同体と非常に似ています。北米の諸国を除けばですが。

佐藤栄作氏や三木武夫氏のアジア太平洋圏構想というのが、この時期に出てくるのですが、「これはまさに自分のアジア・太平洋共同体構想と同じである」と言っています。パン・アジア論者が、なぜアジア・太平洋共同体論者になったのでしょうか。これも結局、近代国家体系論にかかわります。「私のパン・アジアの理想は、中国大陸が中共の支配下に置かれたため、早急の達成が至難となっている。・・・それに先立ちアジア太平洋共同体の実現に努めている」と、鹿島は言っています。ではその基礎となる哲学、認識論というのは何でしょうか。

#### (2) 国際政治の勢力均衡論

1960年代に、鹿島は「国際政治というのは、勢力均衡なのだ」と盛んに言っています。バランス・オブ・パワーが平和を維持するという考え方です。彼からすると、日米安保は、1950年2月に毛沢東が直接ソ連に行って結んだ中ソ友好同盟相互援助条約があるから、これに対する対抗措置なのです。軍事力のない日本が、中ソ友好条約に対抗するためには、アメリカに頼らなかつたら駄目でしょうという考え方です。ですから、1966年には、中ソ有効同盟相互援助条約の期限にあわせて日米安保条約を10年延長しろと提唱します。70年安保というのは私が学生になって2年目だったのですが、それでも当時は安保条約の延長には多くの反対がありました。ですから、そうしたことを考えて彼は10年間延長しろと言ったのです。中ソ友好条約が1980年までなのだから、これに合わせて日米安保を1980年まで延長しなさいという考え方です。

では、中国というのはどのような国なのか。中国は「平和共存を拒否し、世界赤化の野望を捨てず、核武装に乗りだして、・・・その侵略性(膨張



性)が露わである」と言っています。この時代、中国はものすごく混乱していますし、世界革命を唱えていましたから、それに対して平和を維持していくためには、アジア・太平洋共同体が必要だという考え方です。これはアジア版E E C構想だと言っています。この鹿島の構想に対しては反共組織を作ろうとしているという批判がありましたが、彼は「反共組織ではない」と言っています。共産主義に対抗して作っているものではないと言っているのです。僕も学生時代だったならば、この意味が分からなかったと思います。もう一度おさらいすると、国際社会は主権国家からなる集合体です。そして、その関係は「力の均衡」によって維持されているのだと考えていますから、膨張主義であり侵略主義である中国と一緒に平和的な秩序はできないということです。そのような認識を持っていたわけです。だから、アジア・太平洋共同体で一生通せば、反共組織として理解してそれでいいのですが、通さなかったから僕が今報告できるのです(笑)。

### (3) アジア・太平洋からパン・アジアへ

1973年8月『国際時評』(100号記念号)に、彼は「私の長年にわたるパン・アジア結成の祈願も、いまようやくその前途に大きな展望が開けてきた!」と書いています。これがあるから私は、鹿島という人は一貫してパン・アジアを言っていたのだということが分かったのです。そして、この同年、故郷の「秋恵園」にパン・アジアの碑を建て、「わが最大の希願は、いつの日にかパン・アジアの実現を見ることである」と、今日ご出席の中村順次さんの目の前で書かれたと言われる碑文を書かれたわけです。つまり、このとき明らかにアジア・太平洋共同体からパン・アジアへ回帰する可能性を彼は見たわけです。では、何故この時期なのでしょう。1960年代の東アジアの国際環境を見てみますと、東南アジア開発閣僚会議、アジア太平洋協議会、A S E A Nなどができてきます。そして、同時に1972年に日中国交正常化、1973年にベトナム和平、そしてこの前後にA S E A Nとの国交が回復していきます。これは、中国が社会主義であっても近代国家として平和共存政策に移ったということです。ある意味で近代的な国家体系がアジアに



できたわけです。だから将来のパン・アジアの可能性が生まれたということなのです。

そして、1966年の段階で「将来、中ソ同盟条約が破棄され、世界情勢の推移によっては、社会党の言うようなこと（日米安保破棄）も夢ではないかもしれない」と言っています。ものすごく反共思想の強い対立の時期にこう言っているのだから、彼は学者と僕は思います。1975年1月の「時評」の中で、「もし将来日本とアメリカに加えてソ連と中国を含めてアジア・太平洋地域における集団安全保障条約が成立するような情勢になり、また中ソ同盟条約も破棄されるなら、日米安保条約を再検討することができる」と書いたわけです。ですから、彼は一貫して、日米同盟というのは社会主義や共産主義に対する1つの運動というよりも、近代国家体系に挑戦する国があるということが問題であって、そうでなければ条約を通じて平和的な秩序ができるのだという考えだと理解できると思います。

#### [4] 鹿島守之助のパン・アジア主義： 小括と幾つかの論点

結論になりますが、鹿島守之助は、戦中も含めて、戦前、戦中、戦後と、パン・アジアをある意味で主張したと言えます。その構造というのは、ヨーロッパ統合運動に触発され、世界が幾つかの地域圏に統合されていくという認識です。このことは大変な歴史的洞察力ではないかと思えます。鹿島はそうした洞察力のある人だったということではないかと思えます。クーデンホーフの哲学を受け入れて、実践的理想主義に立って、政治家としてこれを実践する。そして研究もやり、社会運動家として出版をし、研究所を作り、それから鹿島平和賞も作る。そのような人生を彼は選んだということが言えます。とりわけ、戦後の外交研究、外交に関する社会的貢献は大きいと思えます。私の理解では、こうした彼の貢献は、現在では忘れられているという意味で過小評価されている、もっと正しく評価されるべきだと思います。

鹿島のパン・アジア論というのは、主権国家の連合体として構想されていて、従って、戦前にあっては植民地の解放運動と一線を画したのです。これが日本にあった他のアジア主義との違いであって、彼が評価されなかった1つの理由でもあります。しかし、彼は現実的です。非常に現実主義的な考え方です。どのように評価するかは非常に難しい歴史学の課題だと思いますが、その研究が必要になると思います。

大東亜共栄圏を一時期アジア統合運動ととらえて支持したことは事実です。この論点も大変重いものです。なぜそのようになったのかというと、彼のある意味で使命感だと思います。彼の考えでは、それは、クーデンホーフが言った「貴族」概念に関係する。だから、ヒトラーを評価して、大東亜共栄圏における日本の役割を認めていくという、デメリットの側面が表に出てくることになってしまったということになると思います。けれども、彼の戦後の社会的貢献というのは、同じ思想の中から出てきているのです。そして、戦後の社会活動には非常に大きな貢献があると思えます。従って、大東亜共栄圏建設にかかわる責任はあるけれども、実は、彼のパン・アジア論は理論的な枠組みとしては、依然としてというか、今だからこそ有効であるのではないかというのが、私の理解です。

何度も言いますが、彼の認識枠組みは主権国家の同盟を通じる平和構想であって、世界平和は勢力均衡によって実現するととらえています。これは、国際政治学においては最もオーソドックスな理論になると思えますが、その理論の上に乗って彼は世界を見えています。

戦後のアジア・太平洋共同体というのは、中国という膨張主義の国があるから、次善の構想として出されたのだということになります。共産主義が内政不干渉原則の下に行動するならば、全然問題なく条約を結ぶことができるし、平和が達成できるのだという考え方です。中国で平和共存政策が取られることによって、パン・アジアの可能性を彼は亡くなる2年前に見たわけです。

日米安保条約は中ソ友好同盟条約の対抗措置である。従って、中ソ同盟が破棄されれば、日米安保条約の再検討も可能で、そうしたら集団的安保をやっ  
ていこうという考え方です。これを現在に持ってくれば、アジアの共同体のような国際的秩序の中で平和を作っ  
ていこうということになると思います。

では、彼のアジア主義というのが傍流に置かれてしまった理由は何かという、1つは外交研究からの演繹的なアジア主義だったからだと思います。ほかのアジア主義者たちが唱えているような、直接的なアジア主義を言ったわけではなくて、「世界がどのような方向にいくのか」という視点から、「アジアはどのようにあるべきか」ということを考えたわけ  
です。そして、先にちょっと触れましたが、主権国家に基づくパン・アジア論でありますから、当時では、植民地解放を課題から外さざるを得なかったわけ  
です。欧米列強に比べて日本はまだ実力がないという現実主義の考え方がそこにあったでしょうが、政治学者の認識論としての主権国家論がこの選  
択をすんなりとさせたのです。これがほかの人たちと違います。

それから、分析手法は「高等政策」でした。彼は外交史の編さんを外務省から命じられたときに、どのような形で外交を書くかをずっと考えて、そこ  
から出てきたのが、彼の言葉によれば「ハイポリティクス」、よく言われる高等政策なのです。国家が、どのようにかかわっていくのかというこ  
とを考えているのであって、個々のいろいろな事象に対する分析ではないわけです。従って、これはほかのアジア主義を言う人たちとは認識の次元が異  
なれます。鹿島が過小評価される理由として、私はこれが一番大きかったのではないかと思います。

しかし、今の時代について言うと、どのようなことが言えるでしょうか。現在は、当然ですが植民地から解放されて、グローバル化が進む世の中です。その  
中で、特に1997年のアジア通貨危機の後ですが、東アジア共同体のような考え方が急速に出て

きたわけです。実は、鹿島の枠組みは、今の枠組みなのです。早すぎたのです。僕は歴史学専門ではないのですが、これを評価するというのは、歴史学  
で非常に難しいと思います。近代国家同士の勢力均衡を進め、世界秩序、平和を作って、同時にその中で各国が、国際機関がかかわるかもしれ  
ませんが、民族解放問題を解決していくという、そのような動きを彼は念頭に置いていたわけです。そのような段階的な平和、発展論を考  
えていたのです。ところが、日本のアジア主義のほとんどの人たちは、むしろ現実の植民地化の中で一直線に抑圧からの解放の立場をと  
って、アジアの自立を考えようとしていたと思います。鹿島のこの枠組みの意義と限界をもう一度検討すべきだ、ということです。

それからもう1つ新しい特徴は、国際行為体の出現です。かつて、鹿島が青春を送った時代は、外交官というのはものすごい特権を持っ  
ていて、留学生も国家が送る人しかいませんでした。一般の国民は、ほとんど海外に出ることも、海外の人たちと会うこともできない。そ  
ういう意味で使命を持った人たち、特定の人たちしか外国人と付き合うことはできなかったのです。今はそういう時代ではないわけ  
です。新しく、市民、NGO、いろいろな人たちや組織が世界を考える時代になっている。その中で、パン・アジアというものを改めて考  
えなければいけないのだと思います。

私の結論ですが、近代国家体系という枠組みの中で世界を見て、その中で秩序を考えたのが鹿島守之助であって、戦争中の大東亜共栄圏思想や大ア  
ジア主義の重い課題は日本の思想家はもちろんほとんどすべての人たちがくぐり抜けなければいけないし、くぐり抜けるときに負わなければい  
けない1つの負の遺産だったのです。彼はそうした時代の罫にとられるのですが、しかし、彼自身の考え方というのは、理論体系は微動だに  
しなかったということになると思います。

そういう点で、時代の限界があったけれども、時代を透徹した目で平和を考えた人であったことは

間違いないだろうと私は思います。いろいろな人にアジアを蔑視するような考え方があります。日本人の中にあるのです。そのような考え方はだんだんと減ってきましたが、まだいろんなとき、ところにでてきます。しかし、彼の本を読むときに、私はそのようなものをほとんど嗅ぎ取ることはできませんでした。もちろん時代の限界にとらわれた表現がないわけではありませんが、彼は研究者として書いているし、戦後、独立すれば、当然、一人前の国家として友好関係を結び、秩序を作っていこうとしていたように思います。

不幸な時代の行動をどのように評価するか、これは非常に難しい問題です。当然、鹿島守之助という人もその問題を、身をもってくぐり抜けながら生きてきた人です。全体として見ると、彼の存在そのものがある意味でクーデンホーフの哲学の上で生きてきた。青年期に大変悩んだ末に、クーデンホーフと会って自分の一生をそのような形で社会に捧げると決意しました。経営の方については、私は時間がなくてほとんど読めませんでした。本当は、そのようなものまで加えて発表すべきかもしれませんが、私の認識の中では、彼がなぜ戦後に外交研究やそれに関する社会活動を精力的にやったのかというのは、自分なりに理解できたのかなと思います。これからはさらに鹿島守之助研究が進んでいくと思います。そうすると、私の仮説が間違っているところもあるかもしれませんが、今のところほぼ行けるのではないかと考えています。

ご親族の方々の前では本当はいいところだけ取り上げた方がいいのかもしれませんが、しかし、明治、大正、昭和の時代を生きるということは、そこで思想や生き方を一貫させるということは極めて難しい時代であり、非常に複雑な時代だったのです。戦後の活動を含めて総体として鹿島守之助という人が、どういう方なのかということを考えると、私は、非常に大きな影響を日本に与え、学会にも与えたと思います。そして、アジア共同体への動きが出てきた今の時代に、今はほとんど忘れ去られてしまっていますが、鹿島守之助という人がヨーロッ

パからパン・ヨーロッパの運動を日本に紹介し、同時にパン・アジアを構想した人物であったことを再発見し、彼の学者としての、社会活動家としての側面を復権すべきではないかと思っています。

どうもありがとうございました。(拍手)

## 質疑応答

(今西) 平川先生、ありがとうございました。では、30分ぐらい時間をとって、質問、コメントなどをお願いしたいと思います。

(スラバ) シュラトフ・スラバと申します。現在、慶應大学の博士課程にいますが、もともとはロシア出身です。ロシアファクターについて質問をさせていただきたいと思います。

日本の外交、学問から見れば、1920年代の反共的思想と、軍事的脅威の論理は、理屈の通った考え方であると思います。しかし、先生がおっしゃった、1920年代のソビエトロシアの軍事的脅威というのは、過大評価されているのではないかと考えています。ソ連は、22年に国内戦争、革命運動が終わったばかりの時期であり、そして干涉軍は追い出されたばかりの状態ですので、軍事的脅威であるどころか、自分の国さえ守れるかどうかという時代だったわけです。関東軍と戦えるだけの力を持つようになったのは、30年代の後半です。ノモンハン事件はその一例です。その前は、むしろロシアにおいて、日本が攻めてくるのではないかとという脅威論が圧倒的に強まっていました。シベリア出兵の記憶もありますから。ですからそのときはどちらかというところ、軍事的脅威ではなくて、むしろ資本家を代表して、もしくは日本の当時の外交代表として、反共的な立場が本当の基盤になっているのではないかとと思いますが、先生はいかがお考えでしょうか。

(平川) 基本的には全くそのとおりだと思います。実際に軍事的な脅威があるかないかというよりも、その思想が日本の国家体系と異なる点が問題なのです。それは、日本の国内に共産主義者をいっぱい作っているわけです。ですから「軍事的な脅威」というのは、実は「思想的脅威」で、日本人の心の中、

民族の中にあるものです。日本人がその思想に感化されるという意味で、それはものすごく大きな脅威なのです。実際に軍事力がどれだけあるかどうかという問題ではないように思います。私がお話したように、鹿島守之助氏は、国家体系が全然違っていているということを、戦後非常に強く自分の言葉として発していますが、当時は、恐らく直感的にそのようなものに対する脅威を感じたのだと思います。恐らく、外交官であることも関係したと思います。決して資本家、経営者であるからということだけではない。それはもちろんあるにしてもそれだけではなくて、認識論の世界で承認できない行動になるわけです。鹿島氏は、若い頃、共産主義について相当に勉強をされているのです。された結果として、彼は共産主義から離れていったわけです。それはやはり、自分の考え、思想と合わないことが問題になったのだと思います。しかし、現実には、お互いに脅



威を感じて軍事を進めていって、大国意識も加わって日本は戦争に突き進んだというのが現実だと思います。答えになるでしょうか。

(スラバ) ありがとうございます。軍事的脅威に関しては、伝統的に海軍と異なって、陸軍の仮想敵国はずっとロシアであったわけです。それは今でも一部はそうであるかもしれません。要するに、軍事的というのが彼はどちらかという思想家としてそれを考えたのではないかということですね。

(平川) そのとおりです。思想家として彼は脅威を感じていたというのが私の理解です。

(スラバ) ありがとうございます。

(イ) 奨学生のイ・ウンギョンと申します。今、羽仁もと子という女性を対象にして博士論文を書いていますので、テーマ的にも、時代的にもすごく似ている部分があって、興味を持ってすごく一生懸命に聞きました。本当にいい勉強になりました。

私が書いている人は女性ですし、クリスチャンだったので、やはり外交家というか、実践家とはい



ろいろな考え方が違うということがわかりました。ただ共通しているところは、当時の健全な知識人が大体そうだったと思われませんが、1920年代後半までは平和主義を主張しています。しかし、満州事変がおこり、日本が世界からいじめられることにすごく悲しみを感じてからは、前の平和主義はどんどんと変わって、自分を弁明する形になっていきます。それから戦後には、また自分の最初の理想に戻るといようになります。このようなパターンがある程度は似ているのではないかと思います。

この点に基づいて伺いたいのは、羽仁もと子もそうですし、鹿島守之助先生もそうだと思いますが、このような思想的な流れがどこまで本当の自分のものであって、どこまで、特に戦時期に使った表現、セリフ、レトリックだったかということです。以前はパン・アジア主義としてあったのに、後でそれは大東亜共栄圏という言葉を使っています。或いは貴族主義日本ということも唱えます。ですから、ある程度、当時の社会の言葉とか、雰囲気とか、議論とかが混ざっていると思います。それをどこまで自分が同意して話しているかが分からないほど混乱しているのです、その時期をどのように評価できるかということにおいては、私もすごく悩んでいますし、今日も同じような気がしました。その点について、評価しようと思えば、自分が考えられる方法は、1つは戦後に自分が戦時期に発言したことについて、自分自身がどのように評価するというか、コメント、「あのときの私の発言は、このような文脈のことでした」という、自分自身の発言がなければ、少し難しいと思われるし、逆に言えば、発言があれば、評価しやすいのではないかという気がします。その部分について、何かコメントがあったかどうか伺いたいです。

もう1つは、パン・アジア主義のことです。外交官出身ですので、国際状況の上でちゃんと議論されているのが分かりますが。パン・アジア主義の中身というか、何をすることが見えてこないような気がします。というのは、1920年代の平和主義を語っている人、主張している日本の知識人が大体「ア

ジア」と言うてはいますが、アジアに相当しているのは中国と日本しかないのです。ほかの国はもっと早く合併されています。インドはイギリスの支配にありましたし。ですから、このときのアジアというのが、今のアジアかどうかという疑問があります。しかも、パン・アジアで何をするつもりか分からないし、戦争期には、先ほど出たとおりに大東亜共栄圏という言葉にすり替えられましたし、戦後にはまた、アジア・太平洋共同体にまた変わっている。ちょっと厳しくいえば、パン・アジアという中身よりは、何か相手を想定してこちらの共同体を作っていくましようというようにも見えます。20年代には今世界がこうなっているから中国と日本がこうしましよう、戦時期にはこうやって私たち日本はこうやりましよう、戦後には、相手が共産主義に変わったので、こちらに戦略的な共同体を作りましようというように。パン・アジア主義の中身が具体的に提示されなければ、そのような批判があり得ると思われまします。以上の2点についてよろしくお願ひいたします。

(平川) 1番目の問題ですが、戦後の論文の中に戦前のことについて書いてありますが、実は、余り反省する言葉はありません。軍の暴走を許してしまつたことが自分の思想を実現できなかった理由であるという言い方をしているのです。ですから、彼は自分の思想体系の中で考えると、そこに問題はなかつたと思つているのです。ずっと一貫しています。自分の認識体系との関係で現実がどのようになるのかが問題であつて、自分がどうなのかということ、次の問題になっています。だから、反省の弁がないから彼の思想は偽物だと言えるかということ、そうは言えないだらうと思つています。でも、そのような批判は当然出てくるだらうと思つています。

2番目の問題になりますが、中身について言うると、「内部に於ては廣汎なる自治、外部に對しては共榮圏の建設」というような表現があるだけです。実際、彼は地域が歴史の中でまとまていくと考へています。戦前ですと、ソビエト連邦であり、

イギリス連邦です。イギリス連邦は形だけ残つていますが、ソビエト連邦はなくなりました。あとはアメリカです。パン・アメリカという言い方をしていますが、アメリカの統合運動があつたわけです。それに対して、ヨーロッパ大陸と日本は、それぞれが地域的に纏まらないといけなひ。そうしなひと、ばらばらになつていつてしまつと危惧しています。彼の時代認識によれば、日本はそのときは朝鮮半島を併合しているわけですが、このまま米欧の列強がそれぞれ奪つていけば、中国もばらばらになつて、やがて日本だつてそうになつてしまつと考へています。そうなるとアジアは発展できなくなる、という危機意識はあると思つています。ですから、その限りでいうと、彼は、歴史が進む地域統合の方向に沿つてアジアで自分が何かをしななければいけなひという強い使命感で動いていて、そのときに現実に起こつた日本のファシズムに対してそれを歴史の進歩と錯覚し評価する、という形でアジアの自立を考へたのだと思つています。

もし、日本のアジア統合がパン・アジアでなくファシズムの成立であつたと評価していつたら、彼は理想とのギャップから思想家をやめて、経営だけをするとか、そのような方向にいつたかもしれません。逆に反体制になつた可能性もあつたかもしれませんが。でも、それは非常に難しい議論で、もっと調べてみないと分らないと、私自身は思つています。

彼の考への中に悪意やアジア蔑視があつたということ、私は感じられなくて、学者として自分の考へる世界の中で、クーデンホーフの思想から直感的に使命感をえて、自分に託されたアジアがどうあるべきか、ということ、常に考へるようになつていつたのではないかと思つています。何度も言うように、戦後は国家体系による世界の結ばれ方を、勢力均衡論の上に置きますので、その秩序を壊すような思想に対しては侵略的な思想とらえて、共存できないということ、自らが共存できないということだけではなくて、相手の侵略に対して自らを守る、歴史が創り出した近代の国家体系を守るという考

え方が出てくるわけです。彼からすると、共産主義に対する批判というより、平和共存政策を取れない国との共同体はできない、逆に、平和共存できるのであれば国家の体制については尊重していつでも対等に関われるのだと、そういう考え方をとっているわけです。ですから、日米安保に関して言うと、最初から、中ソの同盟がなければ日米安保は再考の余地があると言っているわけです。亡くなられる直前までそういう考えだったと思います。ですから、彼の思想はその限りでは一貫して学者であって、考え方と思想は堅持されていると思います。

(せん) せん彩鳳と申します。台湾の出身で、今期の渥美奨学生で、インドの歴史について博士論文を書いています。

先ほどの先生のご発表の中で、一番気になることは、パン・アジア主義の中の日本と中国の関係の話です。私は鹿島さんの著作は読んでいませんが、今日のお話を聞いた感想としては、中国との対等関係を熱心に考えるというよりは、遠くにあるインドの方に親近感を持っていたような気が少しします。植民地の解放運動は、多分その時代の知識人の中には余り念頭にはなかったもので、鹿島さんの主な関心



でもなかったのだと思います。でも、遠くにあるインドに対して、岡倉天心みたいに、少し同情心とか、共感を持っていたのが、少し不思議な気がします。ある意味では、日本の中国への侵略を認めてはいるのですよね。そのような立場をどのように解釈するかという素朴な疑問です。

もう1つ、時代が30年以上も離れて、1960年代以降に、再び自分のパン・アジア主義が実現する可能性が見えてくるように言うのですよね。その30年のスパンをどのように解釈するか、それ自体がものすごく大きなテーマだと思います。私が今、聞いていてとても関心を持ったのは、鹿島さんの中で対中国の認識がどのように変化していくかということです。つまり、共産主義は脅威だと思っていて、しかも強い中国が侵略主義的で、必ずしも良い隣国ではないということは、多分、その時代の共通認識だと思います。インドからしても同様で、正に1962年に中印紛争があった年です。

それと、今回は鹿島さんの経営学について触れなかったことが、すごく気になりました。現実的に、経営者としての鹿島さんが、どう中国と向き合っていたのか。例えば鹿島建設の台湾への進出はものすごく早い時期からです。植民地時期からだったと思います。戦後になって、中国との関わりはいつごろからということをもしご存じであれば教えていただきたいです。

(平川) そこを、これから研究しなくてはいけないということです。今日は、現段階での私の一試論として発表しました。本来ならば、そのような問題までずっと調べていかななくてはいけないのですが、かなり時間がかかるものですから、今回は思想だけを追いました。経営者としての鹿島氏とパン・アジアとの関係は、これからの私の課題にさせて下さい。ところで、今回の研究の仕方は、この建物の記念室の中にあるパン・アジアに関連する論文と思われるものを時代順に1本ずつ読んでいくというものでした。最初から最後までずっと時代順で読んでいて、彼がどのような思想遍歴をしていったのかを



考えました。ばらばらに読んでくっ付けるよりも、その方がいいだろう思い、そのような読み方をしたところ、ロジックとすればこのような形になったということでした。

それから、先ほど申し上げましたように、鹿島氏は1973年にパン・アジアに立ち戻るわけですが、1965年に彼はアジア・太平洋共同体を言うわけです。だから、そういう点でいうと、アジアに対する関心をずっと持っていたわけです。公式な文章は禁止されていて一切ないはずですが、公職追放の時期はどうだったかなど、本当は1つずつ調べていって、その時にどんなことを言われていたのか、書いたものはないかということを探していかなければいけないのですが、今の私の力ではそこまで及ばなかったという点で限界はあると思います。

中国の認識について言いますと、鹿島守之助氏が、どのような形でそれを手に入れたのかということです。1922～1927年まで、ヨーロッパにいて、彼がどのような形でアジアの情報を手に入れたのかというと、外交官ですから、当然、外務省の情報と認識を入れていると思います。1920年代というのは、幣原喜重郎外交で、中国に対してはいわゆる融和政策というか、対等に対応していくというのが外務省の中の主流の考え方ではないかと思っています。軍部が出てくるのに対して、それを押さえるという立場になっています。1922～26年の4年間は、幣原喜重郎外交が続きました。中国で軍閥がいろいろと反日的なことを含めてやっているということは、近代国家になる産みの苦しみのだから、日本はそれに対して、不干渉主義でいくべきであるという立場をとっています。その後、陸軍出身の田中義一が総理大臣になり、一遍に強硬外交になって山東省へ出兵していくという動きが出てくるわけです。この時期になると、外務省はだんだんと中国に対して「手こずる相手」だと思っているのです。外務省は、最初は満州事変やそのようなものに対して否定的なのですが、だんだんと強行姿勢に変わっていきます。むしろ、大東亜共栄圏を支持していく動きに変わっていくのです。なぜそうなるか、日本の軍部

の行動があるからでもあるでしょうが、外務省にしてみると、中国は手に負えない国であるからです。

鹿島氏はその現場にはいないわけですが、その情報を彼は外務省から入手できるわけです。多分、いろいろな情報が外務省経由で入ってきます、或いは入れますから、外務省でそのときの中心的な考え方が入っていると私は思います。だから、彼の中で中国認識というのは、非常に冷たいものになっている。1949年に革命が起こって、それ以降になると、今度は自分の思想体系と違う国になってくるわけですから、しかも混乱を極めていますから、その国に対する対応は、当然冷たいわけです。でも、1960年代にソ連が共存政策に移る、そして1970年代になって中国が共存政策に移る。そのときに、彼は、これでパン・アジアができるのだという判断をしていくわけです。そういう意味で、彼の中国認識は自分で体験したものではなく外務省のバイアスがかかっていると考えていいと思います。それに彼自身は、中国研究の専門家ではありませんから。今、僕が分かるのはそこまでです。

(鄧) 東京大学で工学系を専攻している鄧飛という者です。中国大陸の方から日本に来たのは随分前なのですが。

非常に興味深いご発表で、なおかつ、僕は今日、「あ、そうだな」と非常に思ったことがあります。世界平和というのは、勢力のバランスによって保たれ、そうでないと、多分、人類は平和になれないと、僕は個人的にすごく思っています。鹿島先生も実際、そのような考えを持っていた。「あ、じゃあ僕の考えもそれほど偏っていないんだ」と、少し安心しました。

この考えを僕は本当に素晴らしいと思うのですが、先生の立場から考えて、現在、世界的な勢力のバランスは取れているのでしょうか。これは先生の個人的なご意見で構わないのです。将来的に、もしもこの理論に基づくと、どのようにすれば、真の世界平和が生まれるのでしょうか。果たして、パン・アジアを本当に作って、対アメリカ、対ヨーロッパ

に對抗していくのか。この考えを継承していくと、将来はどのような感じになるのか、先生の考えを聞けたらと思います。

(平川) 今の時代はどのような時代か考える時に、国際政治を考えれば、よく言われるのはユニラテリズムということです。アメリカ一国主義の力が軍事的にも突出していて、それが強すぎる。しかし経済的にいうと、今、ドル安が進んでいますが、私の理解では、アメリカの国力は確実に落ちている。1980年代の日本とか、現在のアジアの国々では、製造業においては、世界の中で最高の力を持っていて、その限りでいうと、アメリカは力がなくなっています。今、アメリカは、金融と軍事力でもっている。それを維持するために、アメリカにお金が出るような秩序を作っている、今のアメリカがあるのです。いわゆるサブプライム・ローンの問題などが起こっているように、アメリカにはいろいろな問題があり、現在の一国主義の秩序がずっと維持されるのは、非常に困難です。そのことが引き起こすいろいろな危険を回避するために、またアメリカの尻拭いのようなことを避けるために、ヨーロッパがやったことが共同体を作って、ユーロという共通通貨を作るということでした。アジアでも

それをしなくては行けないと、私は考えています。アジアの中での統合を深めようとするそのときに、アジアの中で最大の脅威はどこかという、日本と中国だと思っています。

私は日本人で、今は平和主義者ですが、状況が変わったら、軍国主義者になるかもしれません。しかしそうならないためにも、私は自分の考え方を信じておりません。与えられた環境の中で、自分というものが変わっていく可能性があると思っています。これは例が良くないかもしれないけれども、私は45歳で教授になりました。私が就職したのは32歳ですが、そのときに私は、一生、講師でもいいと思いました。勉強が続けられれば講師でもかまわないと思ったのです。僕は、家内にそのようなことをいつか言いました。僕が40歳を過ぎて、友達がみんな教授になっていくときに、私は別に劣っているわけではないはずなのに教授になれなかったのです。そのときに、私はなぜ教授になれないのか、と不満を言うと、家内が「あなたは変わった」と言いました。同じ年齢の人がみんな教授になっているので、私も相応になりたいと思ったのです。私は変わったのです。ですから、そのような点で私は自分を信じていません。でも、自分のできる範囲で、平和というか、共同の繁栄を考えています。そのこ



とが、自分の行動を誤らせないものにすると思うのです。

どのような繁栄の秩序がいいのか、私が考えていることを言いますと、激しく変動するグローバル化の中で、アジアが協力して1つにならなければ、日本はガタガタするし、ほかの国もいろいろと大変なことになると思うからです。今、アジアは非常に経済力が付いてきています。しかし、日本と中国という、この度し難い2つの国をマネージしていくということは、地域にとって重要なことですが、2つの国のどちらか一方がすることはできませんし、他の国ももちろん単独ではできません。私はそう思っています。拓殖大学学長の渡辺利夫先生の興味深い論文がありますが、皆さんがお読みになったらびっくりされると思います。それは、今が正に鹿島守之助氏が考えていた時代で、ソ連と中国が虎視眈々と日本を狙っているというのです。だから、手を組むことはできないと。今はそのような時代ではない、と私は思っています。ですから、共同で協力関係のある秩序を作り、その中でそれに加わっている国々のことを互いに考え、互いに律していくという枠組みが必要だと思えます。地域を単位にその秩序を作らないといけないと考えています。

**(鄧)** すごく素人的な考えなのですが、僕は今、パン・アジアの最も大きな敵とは、日米安保だと考えています。中国やロシアが日本をこれだけ気にするというのは、恐らく日本を気にするのではなくて、日米安保条約や背景にいるアメリカを気にしていると思うのです。ですから、実際にパン・アジアを実行するには、日本は日米安保を解約して、アジアと仲良くした方が現実的ではないかと思えます。個人的な考えですみません。

**(平川)** 1点だけ言うと、アジアの中でも非常に大きく構造が変わってきています。中国という経済力を持った国が急成長をしています。最新のGDPの大きさでいうと、日本がアジア全体の4割5分、中国が3割弱、NIE Sが2割弱で、A S E A N

は1割です。日本は、つい最近までアジアの富の半分以上を占め、既存の秩序の中で最も大きな経済力を持った国です。アジアの中で唯一の先進国だったのです。その後、韓国が発展し、今はもう韓国の平均賃金が日本と同じ、或いは超えたという統計すら出てくる時代になりました。そして中国が行く行く大きくなる。構造が変わるわけです。

その中で、日本は今までの日本であってはいけません。現在、その大きな歴史の流れに積極的に参加するという選択もあれば、それを認めようとせず今までの秩序を維持しよう、今までの自分を守ろうとする考え方も、当然あります。日本の社会の中で、この2つの考えのせめぎ合いがあるわけです。せめぎ合いで守旧派が勝てば、アジアの構造変化の流れとは反対の方向にいくわけです。古いものを守って行こうとするのか、新しいものに参加して行こうとするのか、今、日本が悩んでいる点なのです。ですから、安保がなければ駄目だし、東アジア共同体の中にアメリカを入れるという人たちが出てくるわけです。

でも、私の目から見ると、大きく時代が動いている中で、恐らく米国一辺倒でいいという、そのような流れで日本は行かないだろうと思うのです。対米関係は徐々に相対化していくと思えます。守旧的な考えの人がいるのは中国も同じでしょう。どんどん中国が大きくなってくると、歴史的な中華の思想が復活して、中国こそ世界だと言う人たちが出てくるのが私は怖いのです。ですから、置かれた立場が違う2つの国が、その中で何を選択していくのかというのが、今、私たちに問われているわけです。そのときに僕が感じるのは、韓国であるとか、A S E A Nであるとか、国の規模や経済的にどちらかと言えば小さいけれども、国際的に目配りをしなければならぬ国や地域を大事にしながら関係を持っていくことが、一番大事なのではないかと思っているわけです。

**(今西)** ありがとうございます。留学生を支援している渥美財団にとって、こういう議論は一番の

醍醐味だと私は思っていて、いつもすごくエンジョイしているのですが、皆さん多分、もうビールが必要な時間だと思いますので（笑）、本日の講演は、これで終わります。私の理解では、祖父が一番やりたかったことはパン・アジアだったと思うので、このように彼の業績の評価について議論したことは、多分、祖父にとっては本望だったと思います。平川先生、本当にありがとうございました。（拍手）



## 講師略歴

### ■ 平川 均（ひらかわ・ひとし）

1980年明治大学大学院経営学研究科博士課程単位取得退学。1996年京都大学博士（経済学）。1980年4月より長崎県立国際経済大学（現・長崎県立大学）経済学部講師、助教授、茨城大学人文学部教授、東京経済大学経済学部教授などを経て、2000年10月より名古屋大学経済学部附属国際経済動態研究センター教授。著書に『N I E S—世界システムと開発』同文館出版、1992年。『からゆきさんと経済進出—世界経済のなかのシンガポール—日本関係史』（清水洋氏との共著）コモンズ、1998年4月。『第4世代工業化の政治経済』（佐藤元彦氏との共著）新評論、1998年5月、「東アジア通貨・経済危機と世界経済（上）、（下）」『労働法律旬報』Nos.1454,1455, 1999年4月下旬号、5月上旬号、「新・東アジア経済論—グローバル化と模索する東アジア」（石川幸一氏と共編著）ミネルヴァ書房、2001年4月、など。

## あしがき

### 今西 淳子

2007年度の「渥美奨学生の集い」は、11月2日（金）午後6時より、渥美財団ホールで開催されました。今年の特徴は、本年度奨学生、元奨学生、財団役員に加えて、鹿島建設の関係者や鹿島家の親戚の方々も参加したことでしょう。というのも、今年、渥美財団の選考委員で名古屋大学教授の平川均先生が「鹿島守之助とパン・アジア主義」というテーマのご研究の成果を発表してくださったからです。ご講演の後、渥美奨学生との活発な質疑応答があり、議論はそのまま懇親会に至り、参加者全員にとって、非常に有意義で楽しい集いとなりました。

渥美伊都子理事長の父、鹿島守之助博士は、戦後、鹿島建設を世界一の規模の会社に発展させた昭和期を代表する卓越した実業家として知られていますが、同時に外交史研究者であり、政治家でもありました。研究者として多数の出版物を残し、日本の外交研究とそれに関する活動にも多大な貢献を果しましたが、守之助が外交官としてドイツに赴任し、パン・ヨーロッパ思想を提唱していたクーデンホーフ・カレルギー博士に出会った1920年代後半以降、生涯を通じて、独特なアジア主義者として「アジア連盟」あるいは「アジア共同体」の理想を追求した人物であったことは余り知られていなかかもしれません。守之助が1973年に、生家・永富家の一角に「わが最大の希願は、いつの日にかパン・アジアの実現を見ることである」と刻んだ碑を建立していたことを知れば、意外に思う人がほとんどでしょう。平川先生は、守之助の国際政治や外交に関する膨大な著作や政治活動の軌跡を辿り、彼のアジア主義はどのような思想であり、その思想に駆り立てたものは何か、彼の思想が「大東亜共栄圏」によって象徴される日本のアジア侵略の試練とどう関わり、その試練をどう潜り抜けてきたか、彼の構想が戦後むしろ省みられないできたのは何故かなどを、パワーポイントを使いながらわかりやすく説明してくださいました。そして、東アジア共同体への関心が21世紀に入って急速に高まっている現在、鹿島守之助のパン・アジア論をもう一度正しく評価すべきではないかと結論づけられました。

質疑応答では、今年度奨学生からの「当時のロシアはそのように脅威を感じる必要はなかったのではないか」「日本の知識人が戦争をどう乗り越え、戦後どのように対応していったかは大きな課題なのではないか」「インドを含む旧植民地の独立戦争支援ではなかったが、関心はあったのではないか」「鹿島氏は最晩年になってアジア太平洋共同体からパン・アジアへ戻ったが、その考え方は現在反映されていると思うか」などの質問に対して、平川先生は丁寧にお答えくださいました。

後半の懇親会では、参加者全員が美味しい中華料理を楽しみ、歓談と交流の宴は例年より遅く午後10時ころまで続きました。

当日の写真は次のURLからご覧いただけます。

<http://www.aisf.or.jp/photos/>

（文責：今西淳子）

SGRAレポート No. 0043

---

「渥美奨学生の集い」講演録

**「鹿島守之助とパン・アジア主義」**

---

編集・発行 関口グローバル研究会 (SGRA)

〒112-0014 東京都文京区関口 3-5-8 (財) 渥美国際交流奨学財団内

Tel : 03-3943-7612 Fax : 03-3943-1512

SGRA ホームページ : <http://www.aisf.or.jp/sgra/>

電子メール : [sgra-office@aisf.or.jp](mailto:sgra-office@aisf.or.jp)

発行日 : 2008 年 3 月 1 日

発行責任者 : 今西淳子

印刷 : 藤印刷

---

© 関口グローバル研究会 禁無断転載 本誌記事のお尋ね並びに引用の場合はご連絡ください。

